朝鮮時代の儒学者・尹善道に係わる庭園の構成とその特徴

Studies on the Spatial Composition and the Characteristics of Yun Seun-do's Garden

金 眞成* 藤井英二郎**
Jin-seung KIM Eijiro FUJII

摘要：朝鮮時代中期の儒学者・尹善道が造営したいくつかの庭園遺構について現況測量や史料をもとにその構成を比較し、その背景にある思想とその推移について考察した。最初の隠遁地・芙蓉洞の庭園は治世のあり方を示す強い姿勢がみられるものであった。その4年後に築いた金鎖洞の居処・會心堂は山頂部に位置し、実社会との関わりは薄くなる。しかし、一貫して教育の場が設けられていた点はその隠遁にみられる特徴である。こうした隠遁のあり方は儒教思想が根強い朝鮮の隠遁の特徴を示すものであり、儒教の捉え方に違いはあるものの中国と類似するものと言えよう。しかし、それは日本でみられた隠遁とは大きく異なるものと言える。

1. 序

韓国の朝鮮時代は儒教を政治の規範とし、それは生活にも深く及んでいた。その時代の庭園にみられる儒教の影響については鄭¹⁾、白ら²⁾の研究があるが、当時しばしばみられた隠遁生活と庭園との関わりについての議論は少ない。

本研究は韓・日両国の庭園に見られる儒教の影響を比較することを視野に入れながら、韓国・朝鮮時代の庭園構成の特徴を明らかにしようとするものである。具体的には、江戸時代初期から中期に相当する朝鮮時代中期の代表的な儒学者であり詩人でもある尹善道(1587-1671)の庭園に着目した。

尹善道の庭園遺構としては、先祖代々の海南尹氏³⁾の本居である海南連洞⁴⁾(韓国全羅南道海南郡)をはじめ、清の侵略を受けた後に築いた甫吉島(全羅南道莞島郡)の別業である芙蓉洞、そして隠遁を決意してから築いた海南の水晶洞・聞簾洞・金鎖洞などがあげられる(図1)。

尹善道に関わる庭園については、これまでいくつかの研究がなされている。甫吉島の別業については、莞島郡庁が現況を測量すると同時に樂書齋・洞天石室・洗然亭の位置を推定した⁵⁾。次の

で鄭はその報告書をもとに『孤山先生年譜』の検討を行い、芙蓉洞の庭園構成を、樂書齋がある郎吟溪と、洞天石室、洗然亭の3区域に分けた。そして、それら全体の構成は景勝地に庭園建築を点在させた隠遁のための園林であるとした⁶⁾。

既往の研究は芙蓉洞についてのみであり、その他の別業については検討されていない。尹善道の庭園遺構は、連洞の住まいを除いて、いずれも現在鬱蒼とした樹林に覆われており、往時の姿を容易に探ることはできない。そこで関係者の許可を得て、1995年から97年にかけて、芙蓉洞をはじめ、水晶洞、金鎖洞などの遺構を覆った樹木を整理し、現況測量を実施した。芙蓉洞⁷⁾、水晶洞⁸⁾、そして金鎖洞⁹⁾の各々の空間構成についてはすでに報告した。本報ではこうした検討結果を踏まえ、それぞれの庭園の特徴を比較しながら、その背景をなす孤山の思想とその推移について考察する。

2. 甫吉島に営まれた芙蓉洞の構成

島の主峰から発するもっとも大きな谷に孤山は芙蓉洞と名付けた¹⁰⁾(図2)。それは、その地形が半開した蓮のような形をしていることによるものである。孤山はまた、そこを中国・宋時代の儒学者であり、孤山が真の隠者として崇めた朱子の住まいである建陽の雲谷に準え、神仙が住む蓬壺や蓬萊として捉えていた¹¹⁾。

(1) 樂書齋

孤山が居所として築いた樂書齋は芙蓉洞の南端に位置する山容穏やかな主峰から発する尾根の流れを背負うところに位置することが分かった⁷⁾(図2)。樂書齋の後方に聳える主峰を、孤山は朱子の居処であった紫陽書院に因んで「格紫峯」と名付けた。樂書齋の左右には格紫峯から発する小さな尾根がのび、樂書齋の左右前方の空間を限っている。

樂書齋のこの立地は格紫峯から尾根伝いに流れる気を受け止め、その気が止まる場所、即ち「明堂」¹²⁾に当たる。気脈を受けることを優先した風水論的な立地選定は、樂書齋の向きが結果として日照条件の悪い北向きになっていたことから首肯できる。

さらに樂書齋空間の詳細をみると、前庭に格紫峯からの水を導き入れた大槽を配した¹⁰⁾とされる。気は水によって止まるとされることから、この水槽は格紫峯からの気を止める積極的な意味を持っていたものと考えられる。また、樂書齋の背後には朱子の隠屏に倣って小隠屏と名付けた大岩があり、その大岩の前方は風

図-1 尹善道に係わる庭園遺構の位置

*千葉大学大学院自然科学研究科

**千葉大学園芸学部緑地・環境学科

図-2 甫吉島に営まれた芙蓉洞の空間構成

水論でいう気が集結する「穴」¹³⁾に当たる。

このように樂書齋の立地とその空間構成は、風水論に基づくと同時に朱子の影響を強く受けていたことが分かる。

樂書齋の東側近くには教育機関としての書室や静成菴が建てられていた¹⁰⁾¹⁴⁾。芙蓉洞は孤山が隠遁を決意して営んだ空間であるにも拘わらず、そこに教育の場を設けていたことが特徴的である。これは日本でみられる隠遁空間、例えば石川丈山の詩仙堂¹⁵⁾などとは大きく異なる特徴と言える。つまり、丈山には現世を厭う姿勢がみられ、風雅の道に没頭しこそすれ、教育などを通して現世を正だそうとする姿は見られなかった¹⁶⁾。

樂書齋の前方・北側の谷・郎吟溪を挟んで格紫峯と対峙する山を風水上の案山¹⁷⁾とし、孤山はその山腰・露岩が岩山を呈したところに、仙人の住まいとして「洞天石室」を築いた¹⁰⁾ (図3)。この仙人の住まいを孤山の住居である樂書齋の前方、谷を隔てた山の山腹に配置したところに後述する金鎖洞とは異なる特徴をみいだすことができる。つまり、仙人と孤山の住まいの間に大きな空間的隔たりがあるのである。

図-3 孤山の居所・樂書齋と洞天石室の位置

(2) 洗然亭

洗然亭は格紫峯を源にする流れ・郎吟溪の河口近く、その分水をせき止めて造成した池中の中島に位置する (図2)。この洗然亭は、孤山が「洗然繁華而兼清整廊廟之器也」¹⁸⁾としていることから、そこは清らかに賑わう人々の生活を見る場であり、それはまた太平聖代の世を待つ孤山の治世のあり方を示す場でもあったと考えられる。

こうした孤山の姿勢は、洗然亭を取り囲む水が水田の用水とし

図-4 洗然亭とその庭園構成
(現況測量：1995年)

て使われていたことに具体的にみることができる。すなわち、洗然亭の池水はその北東側に現存する、一辺が2mにも及ぶ多くの扁平な大石によって造られた堰によって成るものであり (図4)、その池水が東北端から流れ出て郎吟溪本流に合流し、その下流に広がる水田用水として使われていたと推定された⁷⁾。つまり、堰は洗然亭を取り囲む園池を形づくるとともに、その下手に位置する水田用水の貯溜と水量調節を計るものであったと判断できる。

洗然亭の南東側の池には大きな七つの岩・「七岩」が現存し、その内の一つに孤山は「或躍」と名付けている¹⁰⁾。これは臥龍に比喻される¹⁹⁾もので、志を持った儒者が活躍できる時代の到来を待つ意味がある。これは、この芙蓉洞に身を置く孤山の立場を端的に示すものであり、朝鮮における隠遁の特徴の一つを示すものと言える。すなわち、朝鮮における隠遁は時の政治から離れることであり、決して実社会から離れるものではない。

以上にみるように、周囲を山容穏やかな稜線に囲まれた谷・芙蓉洞とその要所に配された樂書齋、洞天石室、洗然亭の構成は、鄭⁶⁾が指摘したように景勝地に庭園建築を点在させた園林ということができる。そして、その具体的な配置と構成、さらには背景を探ると、そこには風水論とともに、孤山が崇拝した朱子の影響を色濃く見ることができた。さらに水田と深く係わる園池の在り様は、政治が人々に繁栄をもたらす具体例とも言え、そこには治世のあるべき姿を主張する孤山の姿勢をみることができる。この姿勢は、隠遁の住まい近くに教育の場を設けたことと合わせて、その隠遁の特徴ということができる。

3. 金鎖洞の空間構成

孤山自らが記した『金鎖洞記』をもとに金鎖洞の位置を推定し、そこにみられた建物遺構を中心に測量した結果、孤山が住まいと

した會心堂は緩やかな傾斜地が広がる山上に位置することが分かった⁹⁾。金鎖洞の空間は山裾を流れる川を渡り、急峻な斜面を経て大きな滝に至る空間と、滝の上部に広がる緩やかな傾斜を持つ山頂部の空間に分けられる⁹⁾。その山上の空間を孤山は神仙が住む「上清」とし、別世界・桃源としてとらえ、その中に常の住まい・會心堂を営んでいた。一方、山裾の川から滝に至る経路には孤山が命名した様々な景物が点在し、そこには隠遁に至る孤山の強い意志を読みとることができた⁹⁾。

(1) 會心堂

山上の空間には高麗時代の築造ともされる山城跡が残り、會心堂はその中に位置する(図5)。山上部を構成する頂の中でもっとも高い南側の山から発する尾根の流れの末端に大きな岩の露頭があり、その岩の前面・平坦地に北面する形で會心堂が営まれていた。會心堂の左手・西側には上述の滝の水源になる流れがあり、その向こう側には山頂部の北側を限る低い尾根を望むことができる。この景色に孤山は朱子の雲谷草堂の右手に広がる光景を重ねている²⁰⁾。従って、會心堂の立地選定にもまた樂書齋と同じく風水論とともに朱子の影響が指摘できる。

會心堂の西から北東にのびる尾根の北東端、會心堂から300m程離れた一角には大きな岩の露頭が連なる特異な景観がみられる。孤山はこの光景に神仙の世界・「上清」を見だし、幾つかの岩に「吸月」²¹⁾、「集僊臺」²²⁾、「蓮華」²³⁾、「爛柯」²⁴⁾など神仙にまつわる命名をしていた²⁰⁾(図5)。この神仙世界は孤山の居処・會心堂からほど近い山頂部に位置する(図6)。神仙世界と孤山の居処にみるこの位置関係は、前述の芙蓉洞でみた樂書齋と洞天石室の関係とは大きく異なる。つまり、芙蓉洞では孤山の居処と神仙世界とが谷を隔てて位置していたのに対して、この金鎖洞ではそれらがともに緩やかな起伏をもつ山上に位置している。

芙蓉洞と金鎖洞は僅か4年の月日を隔て構成されたものではあるが、上述の構成にみられる大きな違いからこの間に孤山の心境は大きく変化したものと考えられる。つまり、芙蓉洞の構成には現世への強い拘りと同時に神仙世界とは距離を置いた立地選定がみられるのに対して、金鎖洞では実社会に対する拘りから解放され、神仙世界に近接する立地選定をみることができると言えよう。

會心堂周りにはさらに儒者のあり方を示す構成もみられる。つ

図-6 金鎖洞における山裾から滝までの空間と滝の上部に広がる會心堂を中心とした空間

まり、孤山は會心堂を取り囲む四方の峯に先人を想い起こす「有懷臺」²⁵⁾、「追遠臺」²⁶⁾、さらに日月を望むところとして「寅賓」²⁷⁾、王を拝するところとして「謁願」²⁸⁾などを名付けた²⁰⁾。これらは現世との関わりを断ち切らない隠遁の姿を示すものであり、孤山の隠遁の特徴と言えよう。このような隠遁は、儒教を政治の指導原理とする官僚世界を世俗とし、その世俗から離れることを隠遁とする中国²⁹⁾と類似するが、儒教思想がより強く現れている点に朝鮮の隠遁の特徴をみることができる。

會心堂の周辺には後学の居処である「教義齋」が建てられていたとされる³⁰⁾。家督を譲り、隠遁を表明してから営んだ隠遁地である金鎖洞にも教育の場が設けられていたことは孤山の教育に対する一貫した姿勢であり、これは彼の隠遁にみられる大きな特徴と言えよう。

(2) 揮手亭

山裾を流れる川を西に渡り、急峻な山道を登ると所々に大きな岩の露頭があり、それらを経ると大きな滝に突き当たり、その下・前方に揮手亭の基壇遺構を見いだすことができた⁹⁾(図5)。

この揮手亭に至るまでの景物に付与した孤山の命名には隠遁に至る孤山の心の動きがよく現れている⁹⁾。川を渡ってまもなく現れる道を塞ぐような大きな岩に「不差門」³¹⁾と名付けた。それは自らの選択を確信し、隠遁の決意を示すものである。さらに登ると、拘りを捨てるという意味で名付けられた「棄拘臺」があり、さらにその上方には「中休臺」、また世の中に対する未練が解消することを示す「暢高臺」がある。さらに登ると心地よい風を受

図-5 金鎖洞の空間構成(現況測量:1997年)

図-7 滝と揮手亭跡の関係

けるとの意味を持つ「西風臺」、さらには思わず仰ぎみる意味の「瞻忽」がある。これは迷いを断ち切る閃光にさらされるような意味合いを持っていたものと考えられる。さらにその先には道は一つと言う意味の「至一」があり、その前方に滝が現れる。ここで言う道は朱子学の基本理念の一つである性³²⁾であった³³⁾。

滝は幅 70m にも及ぶ大きな崖の中ほどにあり、その落差は約 9m である。前述した揮手亭の基壇は、その前面・東側の平坦地の東端に位置する (図 7)。揮手とは人家から離れ自分の世界に入ることを意味することから、孤山はこの空間を滝の上部に展開する別天地と、その下部に展開する現世とを区切る結果と位置づけているものと考えられる。

4. 結論

芙蓉洞では格紫峯の北麓、小隠屏と名付けられた大岩の下・北側に樂書齋を建て、また金鎖洞では月出岩と名付けられた大岩の下・北側に會心堂を建てた。これらの建物はいずれも後方に位置する主山の気脈を受ける形になっており、北面していた。このような建物配置は方位よりも気脈を受けることを重視する風水論に基づくものであると言える。

これらの空間にはさらに朱子の影響もみられた。芙蓉洞を朱子が住んだ雲谷とし、その主峰・格紫峯は朱子の紫陽書院に因んで名付けられたものであった。一方、金鎖洞では會心堂の左手に展開する景色に雲谷の右手に広がる景色を重ねていた。

孤山の最初の隠遁地であった芙蓉洞は、甫吉島の主峰から発する大きな谷に位置し、そこに営まれた庭園は実社会と深く係わる

ものであった。つまり、洗然亭には治世のあり方を示す意図が込められ、またその周囲を取り囲む園池は水田耕作と深く係わるものであった。それに対して、その 4 年後に営まれた金鎖洞の居処・會心堂は人家とは遠く隔てた山上部に構成され、そこでは治世のあり方を示す姿勢や水田耕作との関わりはみられなかった。

また、芙蓉洞では神仙世界が孤山の居処・樂書齋から谷を隔てて位置づけられていたのに対して、金鎖洞ではその居処・會心堂とひとつならりの空間に位置づけられていた。従って、金鎖洞では神仙世界により近づいた孤山の心境がみられるとともに、隠遁姿勢の変化を読みとることができる。つまり、治世のあるべき姿を具体的に示す隠遁から、政治を正さそうとする拘りから解放された隠遁への変化である。しかし、芙蓉洞と金鎖洞のいずれにおいても教育の場が設けられていたものであり、この点に孤山の隠遁にみられる一貫した特徴が指摘できる。こうした隠遁のあり方は儒教思想が根強い朝鮮の隠遁の特徴を示すものであり、儒教の捉え方に違いはあるものの中国の隠遁と類似するものと言えよう。しかし、これは政治や教育などの日常生活との関係を絶とうとする日本の隠遁のあり方³⁴⁾とは大きく異なるものと言える。

謝辞：この論文に係わる調査、検討に際して、様々に便宜を図って戴いた尹享植氏 (尹善道の 14 代孫)、現況調査を共にした白志星氏 (全南大学助教授)、金恩一氏 (全南大学専任講師)、全南大学の学生諸氏、そして張美娥氏 (千葉大学環境植栽学研究室) に感謝する。さらに本論の考察において助言を戴いた浅野二郎氏 (千葉大学名誉教授) に謝意を表したい。

補注及び引用文献

- 鄭瞳昨 (1986) : 韓国の庭園 : 民音社, ソウル, 319pp.
- 白志星・藤井英二郎・仲隆裕・浅野二郎 (1992) : 韓国・朝鮮時代の東闕における庭園植栽について—昌徳宮の外朝及び治朝 : 千葉大園芸学部学術報告 46, 203-213
- 海南尹氏 : 全羅南道に位置する海南を本貫すなわち、本籍地・本とする尹氏。
- 金眞成・鄭瞳昨 (1993) : 造景学的側面からみた韓国伝統村の屋外空間構成に関する研究 : 韓国庭苑学会誌 11(1), 69-88
- 莞島郡 (1981) : 甫吉島尹孤山遺跡調査報告書 : 104pp.
- 鄭瞳昨 (1986) : 前出 : 227-241
- 金眞成・藤井英二郎・白志星 (1997) : 朝鮮時代の儒学者・尹善道の甫吉島芙蓉洞庭園に関する研究 : 千葉大園芸学部学術報告 52, 印刷中
- 金眞成, 白志星, 藤井英二郎, 金恩一 (1996) : 孤山・尹善道の海南水晶洞庭園の空間構成に関する研究 (I) : 韓国庭苑学会誌 14(2), 214-222
- 金眞成・藤井英二郎・白志星・金恩一 (1997) : 韓国・朝鮮時代の儒学者・尹善道にみ
- る隠遁の姿—日本との比較を視野に入れながら : 平成 9 年度日本庭園学会研究大会発表要旨集, 6-9
- 尹悰 (1748) : 甫吉島識 : 尹享植氏所蔵, 海南
- 徐鼎修 (1798) : 孤山遺稿 : 卷之一 三十四, 詩, 「黄原雜詠三首」, 尹享植氏所蔵, 海南
- 崔昌祚 (1986) : 韓国の風水思想 : 民音社, ソウル, 62-64
- 崔昌祚 (1986) : 前出, 56-57, 125
- 尹觀夏 (1878) : 孤山先生年譜 : 尹享植氏所蔵, 海南
- 石川琢堂 (1961) : 詩仙堂 : 便利堂, 32pp.
- 林羅山 (1643) : 詩仙堂記 (石川琢堂 (1961) : 前出, 27-29 より)
- 崔昌祚 (1986) : 前出 : 62. 穴の前にある朝山より低くて小さい山。
- 尹悰 (1748) : 前出 : 洗然繁華而兼清整廊廟之器也 : 洗然繁華しながら清整を兼ねていることから朝廷で天下の政治を行うことができる才能すなわち、廊廟之器がある。
- 徐鼎修 (1798) : 前出 : 卷之一 三十三 詩, 或躍巖
- 尹善道 (1641) : 金鎖洞記 : 尹享植氏所蔵, 海南
- 吸月 : 天端が平らな石臺を仙人が集う場として見立て吸月とする。『金鎖洞記』より
- 集僊臺 : 多くの仙人が道を講じる様子に見立てる。同上
- 蓮華臺 : 蓮のつぼみが開いたような尖った石角の様子から見立てる。同上
- 爛柯 : 仙人が碁盤に向かう故事に倣ったもので、碁に夢中になって時の経つのも忘れることを爛柯 (斧の柄が腐ること) というようになった。石川忠久 (1984) : 中国古典詩集花 : 小学館, 184-185
- 有懷 : 二人の意に懐かしさがある
- 追遠 : 祖先を想い浮かべる心
- 賓賓 : 尊敬して導く
- 踟躕 : かがんで願う
- 小尾郊一 (1995) : 中国の隠遁思想 : 中央公論社, 193pp.
- 尹觀夏 (1878) : 前出 : 卷之一 十六
- 不差 : 間違いないという意味
- 尹善道 (1641) : 前出 : 性之反之及其至也則一也から「至一」と名付ける。
- 朱子が集註した『小学集註』の立教第一に「天命之謂性」とあり、性は天命であり、その性はまた「理」とであると解釈している。
- 小尾郊一 (1995) : 前出 : i

Summary : Based on the survey of present situation and the analysis of related historical literature, we studied the spatial composition of Puyongdong and Gumseidong gardens, constructed by Yun Seun-do(Kosan), an outstanding confucian in Chosen period, who spent a secluded life for many years in both areas. These spatial composition are considered to be fundamentally based on the two ideas; Pungsu theory and the doctrines of Zhuzi. Puyongdong, his first seclusion area, is located in a big valley of Bogil island. We could find out his ideals showing the idea of politics. On the contrary, Hoeshimdang of Gumseidong which was constructed in about 4 years later in the upper area of a mountain the relation with the real world becomes thin. These characteristics are deep-rooted in Confucianism, as in Chinese seclusion. But, it is quite different from seclusion in Japan.